六古窯の可能性

Possibility of Six Ancient Kiln **Key-words**: Six ancient kiln

高橋 孝治

Koji TAKAHASHI

1. 六古窯のはじまり

やきものの原料となる土や燃料となる木に恵まれた 日本列島. 約15000年前に、世界で最古級と言われる 縄文土器の生産が始まってから現在まで、私たち日本 人の暮らしを支えるやきものづくりが、脈々と営まれ てきた. 5世紀初頭、朝鮮半島の伽耶や百済から、窯 を用いた高温焼成の須恵器と呼ばれるやきものがもた らされ、堅く丈夫で、吸水性の低い容れ物であること から全国に普及した. 7世紀末から8世紀前には中国 の施釉陶器がもたらされ、 当時の上流階級に好まれた。 日本ではまだ磁器を焼く技術はなく、青磁も緑釉陶器 で模倣されたが、尾張東部で、高火度焼成の灰釉陶器 が生み出され、国産の高級陶器として全国へ供給され た. この広域な生産地を猿投窯と言う. 10世紀後半 に日宋貿易が盛んになると、中国磁器の流入が増大し、 猿投窯の灰釉陶器の需要が減退し、新たな需要層を求 めて、11世紀後半には無釉の碗、皿の大量生産が始まっ た. これを山茶碗と呼ぶ. 生産性が高く. 安価なため 一般農民層にまで需要が拡大していった. このため, 山茶碗の生産地は拡がっていき、中世窯業の先駆けと なった。中世窯業とは、壺・甕・すり鉢等の生活必需 品を大量生産し、非常に広範囲に供給する窯業のあり 方である(図1). 同時代には産地は80ほどあったと 言われているが、その中で現在まで続く代表的な6つ の産地(瀬戸・常滑・信楽・越前・丹波・備前)を六



図1 籠池古窯(かごいけこよう)常滑市内にある,中世の古窯跡、常滑を含む知多半島には中世にこのような窯が3000基ほどあったと言われている.

古窯と呼び、1948年頃に陶磁器研究者の小山冨士夫氏によって、命名された。

2. 日本遺産に認定

2017年春に、六古窯が文化庁の日本遺産に認定され、 筆者は六古窯日本遺産のクリエイティブ・ディレクター に就任した(図 2). 3年前に東京から六古窯の1つで ある常滑に移住したが、以前はプロダクトデザイナー として11年間、無印良品の生活雑貨のデザインに従 事していた、製造小売業のものづくりのプロセスにおいては商品のアイデアありきで、つくり手(メーカー) を選ぶのは後手になることも少なくないのであるが、 国内のつくり手ありきのものづくりに関わりたいと考え、常滑への移住を決意した、現在はプロダクトデザインを通じ、つくり手・産地と使い手をつなぐ活動や 常滑焼の人材育成等に携わっている。そこから、六つ の産地と向き合い協同する意義を感じた.

3. 六古窯を見つめ直す

まずは六古窯を体感しようと6つの産地に通った. 前述の、中世に六古窯が成立した背景を知り、加えて、 広域に独自の流通圏を得るための海運や、市場にほど 近い山間部等立地に恵まれた六古窯が残るべくして残っ た事を知った(図3)。また、生活雑器や祭器、茶陶、 輸出品、軍事陶器、代用陶器、建築・衛生陶器等時代 に合わせてさまざまなやきものを生み出してきた、特 に近世以降の『節操のなさ』も六古窯共通の事だと知っ



図2 六古窯日本遺産『旅する,千年,六古窯』のロゴマーク.「千」と「六」,やきものには欠かせない「炎」を彷彿とさせる.デザインは UMA/design farm による.



図3 丹波焼の里,篠山市今田町立杭地区.京都や大阪等, 古来の一大消費地近くの山間部.



図4 「旅する,千年,六古窯―火と人,土と人,水と人が出会った風景―」展・信楽より、江戸時代以降に信楽で作られてきたやきもの、徳利,汽車土瓶等。



図5 備前焼窯元・一陽窯の窯焚き. 年に2回, 10昼夜半じっくり焚く.



図6 越前の土本訓寛・久美子夫妻の工房.

た(図4). 戦後の高度経済成長期とともに、陶磁器 製品は日用品であれば安価な樹脂製品に代替されていっ た. 別の土地から素材を仕入れたり. 海外で製造し. 運んできた方が安いという事も出てきた. 経済合理性 の追求が、ものづくりの地域性を失わせ均一化し、作 らずに作らせるという選択を時として良しとしてきた. 国内の人口が減少していき、過去のような安定的な大 きな需要は望めず、一方で環境問題や担い手不足も起 きている中, 六古窯産地では, 産地の存続を危機的に 捉える人が少なくない. そうしたなか、その土地の原 土を用い、土づくりを行い、窯を築き、薪をくべて窯 を焚くつくり手達に出会った(図5).彼らは、ただ スタイルとして取り入れているのではなく、日本とや きものの長い関わりを学んでいる. 進んで発掘調査に 参加し、陶片や古窯跡と向き合い、中世の陶工と対話 をするのである. その土地の素材をどのように工夫し てやきものに仕上げるか、自然と人の営みとしてのや



図7 甲賀市内の巨大な製陶所跡をリノベーションした, NOTA&design のスタジオ.



図8 瀬戸本業窯の代々続く陶房、瀬戸では陶房を「モロ」と呼ぶ、

きものの技術を体得しようともしている(図6).また. 戦前に産地に創立した窯業試験場のテストピースや産 業遺産等のアーカイブをリデザインし、自ら製造する デザイナー (図7) や、大量生産一辺倒、機械任せで 進んだ産地において、こぼれ落ちてしまった『手仕事』 にこだわり続けてきた窯元の後継(図8)とも出会えた. ここに選ばせていただいた、今を生きる6人の新たな 六古窯への眼差しが、六古窯産地においてやきものの 可能性を開き、継承の起点になると強く感じそれぞれ テーマを設け、貴重な製作の時間を割いて執筆を頂い た. 六古窯の魅力は. 中世から現在も続く産地である 事. 今を生きる私たちが. 日常の生活に取り入れたり. ものづくりの現場を訪れる事ができる、日本人に親し みのある固有の文化である. 各産地の担い手が長い歴 史の根本に立ち戻り、 六古窯の先人達の姿勢に学び時 代に合った仕方を模索し、継承して欲しいと願ってや まない.

筆者紹介



高橋 孝治 (たかはし こうじ)

1980年大分県生まれ、2004年多摩美術大学卒業、2005~2015年(株) 良品計画で無印良品の生活雑貨のデザインを行う、現在、常滑に拠点を置きプロダクトデザインを軸にさまざまなプロジェクトを行う、常滑市陶業陶芸振興事業推進コーディネーター、2017年より、六古窯日本遺産活用協議会クリエイティブ・ディレクター、

[連絡先] 〒 479-0836 愛知県常滑市栄町 2-83-1 E-mail: kojitakahashi18@gmail.com